

意味のある生き方をしようと思うならば、まず意味を問わぬことだ。

楽園とは、真摯に目指しつつも決してそこに至るべきではない道標。

軽蔑とは、即効性で中毒症状のある、最も安易な精神安定剤である。

時として陰口は屈折した人間愛の表現となる。自己保身にしか関心を抱かないような真のエゴイストは決してひとを悪くいわない。

いくばくかの憎しみの混じらない愛は、真実とはいえぬ。しかし憎悪にはわずかばかりの愛も入りこむ余地はない。これが愛と憎悪を区別するただひとつの基準である。

傲慢さと利己心の結合は謙遜を産みだす。

老人が真に恐れるものは死ではなく、それまでの自分の人生の無意味さである。

助言とは、自分のレベルにまで相手を引きずり落とそうとする試みである。

ペシミズムは実は世間にたいする甘えにすぎない。真のペシミストは決してその暗い顔を世間に見せるようなことはしない。

恋愛のできぬ人間とは、孤独を知らぬ人種と孤独に慣れた人種である。

愛していることの喜びとは、ほとんどの場合、所有していることの満足感にほかならない。

もし限りなく愛しあう二人がいるとすれば、彼らはただ静かに向かいあうだけでどんな淫らな交わりにも劣らないほどの性的興奮を味わいうるだろう。

何についてであれ所有することの真の喜びは、それを手にする直前にある。

安易にひざまずくものは、やがて無理にでも人をひざまずかせそうとする。

処世術とは、互いに軽蔑という格子の奥に身を潜め、その内から手を差し伸べて恐る恐る握手することである。

愛は気を抜くと立ち止まってしまうが憎悪は気がつく走り出している。

人から軽蔑されることにかすかな優越感を感じる、という屈折した感情がある。

最も弱い人間とは、人に弱さを見せることを恐れる人間である。したがってすべての人間はもっとも弱い人間である。

人は真理を他人におしつけられるくらいならば、誤謬を自ら選ぶことを好む。真理はそれほど軽く、自我はそれほど重い。

自負を見せるのは不遜である。しかし持っていて見せないのはそれ以上の不遜である。

奴隸根性と暴君の傲慢さは紙一重である。それは自尊心という傷つきやすい裸体がいかなる衣装で己を隠しているかという違いでしかない。

憎むとは、対等であろうとすることの不器用な表現である。

身繕いは自己嫌悪と不安とに由来する。

ユートピアを建築するにはただ一つの事業で足りる。それはすなわち人間感情から軽蔑の念を放逐することである。このことだけで驕慢、卑屈、不機嫌、嫉妬等々、人間社会に争いをもたらす源の全てを根だやしにすることができる。

偽善的であるということは、生きることにそれだけ真剣であるを意味している。それはひどく人間的だ。

真の悪徳はそれだけで一人立ちできる。美德はそれが強くなればなるほどまったく違った二つの顔を持つことになる。けれども美德をけなしているわけではない。むしろだからこそ美德の方が2倍よけいに楽しめるのだ。

偽悪家ではまだまだ甘い。世間に対して自分の隠された美德を気付いて欲しいという甘えがある。偽善者を装うほどにならなければならない。そこまでいけば世間との決別、自己への揺るぎない信頼が明瞭になる。

真のペシミズムは沈黙を守る。表現されたペシミズムはどこかしら必ず情熱を隠し持っている。

懐疑論。それはこの混沌とした世界からの唯一つの心安らかな逃避場である。

神の概念がかくも多岐を極めているのであれば、もしかすれば私が神である可能性も否定しがたい……。いや、やはりそういうことはありそうもない。もし私が神ならばもっとましな世界を作ったであろうから。

人間の行動の中で最も嫌悪感をそそるものは、無意識の偽善である。狡智の演じる偽善はむしろすがすがしい。

軽蔑とは、憎しみを回避するためのもっとも卑屈な手段である。

自分を信じながら生きている人間など私は未だかつて一人としてであったことはない。自分一人のみを信じている人間が仮にいとすれば、彼はまずこの世界が存在するのかという点から疑い、そのほかにも概念、真理、社会、善、感覚、愛などおそらく無限の問題に直面する。そしてそれらを自我から根拠付ける作業だけで短い一生を使い果たしてしまうであろう。人はみな自分よりも回りの人間の顔色を信じる。それを古代の偉い学者はうまい言葉で表現した。いわく、「人間は社会的動物である。」

幸せは他者への妬みからはじまり、他者への無関心に終わる。

自分の生活が空虚になるにつれて、人は政治の話題をなすようになる。

「人間のかわりに式が考えてくれる」といったライブニッツは、今日における理数系の繁栄と愚鈍の下地をつくった。

疑念が生じるというのは実はある恐ろしい確信が心の底に芽生えつつあるということにほかならない。

自惚れと自己嫌悪は必ず一緒にやってくる。

憎悪は、立ち止まることを許されない。立ち止まった途端にそれは自分自身に振りむくからだ。

人はみな自己にたいする嫌悪感を隠し持っている。それはすなわち人は自らに満足できるほど自己にたいして盲目ではないということを示している。

賞賛とは、自己の優越的地位の巧妙な宣伝である。

善とは、魅力のなくなった人間が他人の気をひくために最後にすがる美德（媚徳？）であるかも知れない。

理数系の知性には、その怜悯な実証性の背後に自然秩序という狂信が潜む。

友情とは、決して触れてはならない一言を触れないでおくことによってかろうじて成りたつ。

絶望したことの無い人間は甘美な夢を見ることもできない。

ほとんどの場合、自分に敵対する者こそが自分についてのもっとも深い理解者である。そしてこのことを無意識に勘付いているからこそ、人は自己に敵対する者をさらに激しく憎む。

たしかに認識する者は冷ややかである。しかしその冷やかさは認識される世界ほどではない。

欲望から羨望が生まれるのではなく、羨望から欲望が生まれる。すなわち人間のもっとも根本的な衝動は欲望ではなく羨望だ。「我思うゆえに我あり」ではなく、「彼欲するゆえに我あり」というべきであった。したがって近代経済学は根本からして間違っている。効用曲線は一から書きなおされなければならない。共産主義は人間の利己性をまったく看過した。功利主義は人間の利己性に潜む嫉妬深い心情を直視しない。

真に清らかな心とは、愛する心でもなければ正直な心でもなく、比べることのない心であろう。

深く認識する者の怒りは、悲しみに似ている。

真の知性というのはこの世界がどのようにあるかを解明することではなく、いまここに何が欠けているのかに気付くことである。

巨人の肩に乗った近眼は、盲目に近い。

ヒューマンリストの不健全さは、彼らがもっぱら虐げられている者にたいしてだけ目を注ぐという点にある。彼らにとっては、街を歩く恋人たちは嫌悪すべき一対のエゴイストとしてしか映らない。

共感や思いやりとは、孤独なインテリが自分の寂しさを紛らわすために考えだした自慰にすぎない。それは生活に没頭する健全な人間たちには思いもよらない高貴な遊戯である。

信仰とは、自己が創造したものではないものの前にひざまずくことである。したがって現代においてそれは一握りの真摯な宗教家と無数の理数系たちによる営みである。前者には苦悩が、後者には愚鈍が存在する。

体系化とは一握りの真摯な主張を多くの嘘で塗り固めてしまう努力である。

認識という刃は世界を切り開き、自己を切り刻む。

自分が何を知らないか、ということを知ることが認識の第一歩である。しかしそれはおそらく最後の一步でもある。